

2014/15 冬期における雪崩災害の発生状況について

○和泉 薫・河島克久・伊豫部勉・松元高峰（新潟大・災害研）

1. はじめに 2014/15 冬期は、日本海側の山沿いで大雪となり、北は北海道から西は鳥取県までの広域にわたって雪崩災害が発生した。このうち北海道オホーツク海沿岸では、発達した低気圧の停滞によって近年では経験の無い大雪となり羅臼町が孤立し雪崩災害も発生した。昨年の関東甲信地方の大雪と同様、元々雪の少ない地域に経験の無いような大雪が降ると即雪崩災害につながるものが改めて認識された。本稿では、現地調査やネット情報から取り纏めた 2014/15 年冬期における雪崩災害の発生状況について報告する。

2. 2014/15 冬期の気象状況 12 月から 1 月にかけては、冬型の気圧配置となることが多く、日本付近には周期的に強い寒気が南下し、全国的に気温の低い日が続いて、日本海側では降雪量、積雪とも平年を大きく上回った。1～2 月は、寒気の南下が弱かったにもかかわらず、低気圧の発達に伴って冬型の気圧配置が強まったことから、北陸以北の本州山沿いでは冬の降雪量や最深積雪が平年を上回った。それ以降、3 月 9～12 日にかけて北海道付近で発達した低気圧によって北日本や東・西日本の日本海側で暴風雪・大雪になったほか、低気圧に向かっての暖気の流入や高気圧の晴天による気温上昇のため全国的に気温が高くなり、積雪地における融雪が進行した。この気象推移は、図 1 のアメダス津南の降積雪変化からも読み取れる。

3. 雪崩災害の発生状況 2014/15 冬期の雪崩災害は全国でこれまでの調べで 57 件発生していたことがわかった。月別雪崩災害発生件数及び表層・全層の内訳は、12 月：4 件（表層 4，全層 0），1 月：16 件（12，4），2 月：17 件（6，11），3 月：16 件（3，13），4 月（0，4）と上記気象状況を反映して、12 月から 2 月上旬までが表層雪崩、2 月中旬以降が全層雪崩を主体に発生していたことがわかる。都道府県別の雪崩災害件数が 10 件を超えたのは、発達して南からの暖気を取り込んだ動きの遅い低気圧に度々襲われた北海道（10 件）と、図 1 のように 12 月から 1 月にかけて度々大雪に見舞われ平年を大きく上回るハイペースで積雪が急増した新潟県（12 件）・長野県（10 件）の計 3 県である。特に北海道根室管内での雪崩災害は、北海道東方で発達した低気圧の動きが遅く湿った暖気が多量に流入し羅臼町にこれまで経験のない大雪を降らせたことによる。

雪崩災害を被災対象別に分類すると、件数では道路の 38 件と冬期レジャーの 12 件で大半を占めており、冬期の死者 13 人の全部が冬期レジャーで占められている。13 人の死者の内 10 人が山スキー中の表層雪崩による被災で、1 月 17～23 日と 2 月中旬に集中している。これら期間には、低気圧が北海道東方で発達し冬型気圧配置が強まったり、上空に強い寒気が入ったりして大雪がもたらされている。外国人を含む 10 人の山スキーヤーの被災はグレンデ外であり、バックカントリーにおける雪崩リスクの認識不足等がマスコミで問題視された。

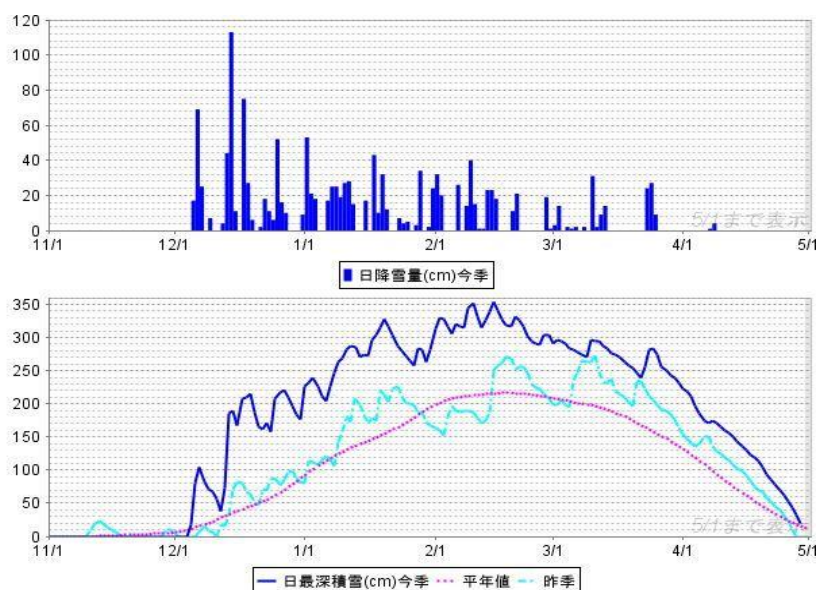


図 1 アメダス津南（新潟県）における 2014/15 冬期の降積雪の推移（新潟地方気象台・雪の状況より）